

は、「二祖法語」にあらわれる本間源阿弥阿佐が著しく、その

(改稿) 俳諧表現論としての本情の説

「此の稿は、昭和七年九月、『日本文学』第二巻第九号」(鹿兒島・日本文学研究社発行)に発表した同題の拙論を故あって書き改めたものである。昭和十一年、私が病気で東京を去って郷里阿蘇に隠退した際に、掲載誌を散逸させ、そののち、かろうじて買い求めたが、なぜか拙論については2頁分を除いて破り去られていたので、私の手許には、完全な形では残っていないのである。半世紀近くも探して来たが、まだ求め得ていない。いっそのこと、旧稿を捨てて、改めて書いた方が楽であろうと、今、古い記憶をもとに、改めて資料を調べて、書き改めることにした次第である。当時は「日本文学」誌は友人の新屋敷幸繁・峯岸義秋両氏を編集主幹として私も数人で毎月その誌面を埋めて発行したもので、特に私の論文などは草稿といふべきものであったから、改稿するとなれば、全く新しく筆を染めることになる。この旧論には、私としては、すくなくらず愛着を感じて来た。その後も俳論における本情論に触れた論考を見受けないが、近代の歌論・俳論における写生論の先蹤とも考えら

れるので、今頃私などがこれを云云するのはいささか場違いかとも思うのであるが、敢えてこれを書き残しておきたいと思うのである。旧稿では「本情の説」としたが、用字としては、「本情」「本性」いづれがふさわしいかの問題も新たに生じて来る。特に、「去来抄」については、伝本間の本文の異同も多いので、この点も新たに触れざるを得ない。「本性」は古い用字法であり、「本情」は新しい。「本性」の伝統的な用法のそれは、「ホンジャウ」と読むのだから、「本情」は単に文字面を改めたものだと判断される。今日の語感からすると「本性」と書くこと「ホンジャウ」と清音に読まれやすいので、その点では、近世の新しい字面だが「本情」の方がまぎれる恐れはなからう。

原 田 芳 起

二、本情・本性は用字の相違か
問題を提起するのは、まず「去来抄」の伝本による用字の差異で

ある。旧稿では私が資料としたのが「日本俳書大系」などだけであつたので、異文を問題にする事もなかったが、「日本古典文学大系」「古典俳文学大系」「芭蕉全集」などが底本とする伝本との間にはかなりの相違があるので、避けて通る事の出来ない問題があつた事を知らされるのである。

日本俳書大系本の底本は、安永四年の板本である。これは、まず流布本として扱つてよろしいであらう。日本古典文学大系以下の諸本の底本は、国立国会図書館蔵の一本であるが、その中で特に問題になる「先師評」「同門評」の部分は、大東急記念文庫蔵の去来自筆と目される本に近いので、「去来抄」研究の資料としての価値は極めて高いと思われる。大東急記念文庫本は「先師評」「同門評」二編だけであるので、この二編はこれを底本とし、他の部分は国会図書館蔵本を底本としているものが多い。

そこで便宜上、大東急記念文庫本・国会図書館本を甲類本文とし、板本を乙類本文として、両者を対比して、何らかの見解を抽出してみようと思う。本行に甲類本文を掲げ、校異として主要な乙類本文の相異を注記する。本行と校異との対照番号を算用数字で記す。

うらやましおもひ切時猫の恋 越人

先師伊賀より此句を書贈りて曰く、心に風雅有もの、一度口にいえずと云事なし。かれが風流、此にいたりて本性をあらはせりト也。此より前、越人名四方に高く、人のもてはやすほ句おほし。しかれども、此に至りて初て本性を顯すとほの給ひけ

問り。(先師評) 校異 1 俗情 2 不_レ出 3 風雅 4 本情 5 保ナシ 6 なり
特に問題なのは4である。文末の方の「本性」は両者同一なので、まず考えられる事は、この乙類本文でも「本情」「本性」を同じように用いているという事である。

甲類本文を乙類本文と比べてみると、伝来の事情という点を二応離れて考えても、乙類の方には種々の点でさかしらな変更や整理が加わっている事が感じられる。1の「風雅」「俗情」の対比についても、「俗情」はいかにも不自然である。どう不自然であるかには問題があらう。日本古典文学大系本の頭注には、「本情」の版本「俗情あるもの」。版本に従えば、意味が反対になる。即ち、越人がこの句によって馬脚を現わしたの意になる。東急本に従うべきである。浪花宛去来書簡にこの句を掲げ「又、越人も定家卿の猪の恋のうたによりて、うらやましおもひ切る時猫の恋、おもひ切時をうらやみたるは、越人の秀作と奉存候」とあるのによつても、東急本の本文のよいことが解る。とあるのは一見識であつて、結論の部分は正しいと思うが、「越人がこの句によって馬脚を現わしたの意になる」という部分にはいささか不審が持たれる。私の解釈では、芭蕉書簡の「心に風雅有もの、一度口にいえずと云ふ事なし」の真意は、後文「越人、名四方に高く、人のもてはやす発句多し」が解説しているように、越人の「うらやまし」の句が、風雅を愛する人々でこれを口にしないものはないという事を言ったものである。「俗情」がおかしいという事

はし。しかれども、此に至りて初て本性を躰すとはの終ひけ

は、その論理から納得されよう。しかし、「俗情」に改めた加筆の心理はよくはわからないが、必ずしも越人をおとしたものではあるまい。それでは芭蕉の真意からあまりにも遠ざかる。「心に俗情ある者」は、俳諧の平俗の情を愛する者を意味しよう。俳諧の本質はその平俗にあり、風雅の上に平俗の「をかしみ」を加えたものである。越人の此の句は、俳諧の軽みに到達したものである。そう解しないと、次の「かれが風流ここに至りて本性をあらはせり」も解釈しがたくなる。越人の卑俗さの本性を現わしたというのでは決していない。

「本性」とは、その物本来の性を意味する。ここでは猫の恋のあわれさおかしさの真実相をつかみ得ている点に言及して激賞したのであり、「俗情」とした事で意味が反対になり、越人をおとしたという事にはならない。

この「本性」は越人の本性ではない。猫の恋のおかしさあわれさの実感実相であり、また俳諧の美的本質でもある。「本性」はあくまで美的対象の本有するものである。越人の俳諧の風流がこれをつかみ取って、表現を与えるに至ったと賞めた芭蕉の本意は動くものではない。さきの「心に風雅あるもの」は世の俳諧者流をさす。これを「心に俗情あるもの」と少しく表現を変えても、さす所は異ならない。

鶯の身を逆にはつね哉

其角

鶯の岩にすがりて初音哉

素行

去来曰、角が句は、乗暖の乱鶯也。幼鶯に身を逆にする曲なし。

初¹の字心得がたし。行が句は鳴鶯の姿にあらず。岩にすがるは、或は物におそはれて飛びかゝりたる姿、或は餌ひろふ時、又はここよりかしこへ飛うつらんと伝ひ道にしたるさま也。

凡、物を作するに、本性をしるべし。しらざる時は珍物新詞に魂を奪はれて外の事になれり。魂を奪るは、其物に著する故也。是を本意を失ふと云。角が功者すら時に取て過ち有。初学の¹⁴人慎むべし。(同門評)

校異 1暮春 2初鶯 3啼鶯 4怖れて 5あがり 6ナ

シ 7ナシ 8本情 9奇言 10ナシ 11ナシ 12其本意を失ふ事有べし 13過てる事多し 14慎まざればあるべからず

後人が手を加えて添削したにしては、あまりに大胆で、度が過ぎているという感もないではない。

ともあれ、右の校異で最も大きな問題は勿論8の「本性」「本情」の相違にある。これについての言語上の考察は、項を改めて整理する事としたいが、用字の上で「本性」から「本情」への移行をあなたがちに否定的に抹殺してしまうべきではなからうと思う。去来自身の改稿の過程でも生じる可能性が全くないとはいえない。

10 11 12にかけて、大東急本系が第一次の原初の形を示す事は論のない所であるが、「珍物新詞に魂を奪はれて外の事になれり」は、いささか飛躍に過ぎて語の続きがらに自然さを欠く。「魂を奪はるるは其の物に著する故なり」もまた然り。理を以て詰めれば、奇物新詞に魂を奪われるのは、作者の着想の新奇さに流されるのである。其の物(素材)に執着するが故とは言えなくなる。対象の美

相に観入するならば、むやみに表現の新奇さに淫してはならないと言おうとしているならば、大東急本の原形は必ずしも有効とも思われない。むしろ板本系の「珍物奇言に魂を奪はれて、其の本意を失ふ事有るべし」と縮約した方が、はるかに効果的で、徒らな表現がなくなっている。

1の「乗暖の」は耳に入りにくい。「暮春の乱鶯なり」の方が、わかりやすいし、表現の奇を求めた嫌いは消える。

これらの点から、去来の改稿本ないしはそれに近いものが存在して、それが安永板本の基礎になっていた可能性も、一応は考えておきたい気がする。

去来曰、俳諧は新敷趣を専とすといへども、物の本性をたがふべからず。若し其事を打返して云には品あり。譬へば、感時花・涙・恨、惜別鳥動心、或は、桜花ちらば散なん散らずとも大官人の来ても見なくに、と云へる類也。感時、惜別、大官人の見ざる所、一首の勝也。(修行)

校異 …… 点を右傍に記した部分は甲類本脱落、他の諸本に依つて補入。

1 「本性」は板本系「本情」。

右の「本性」を「本情」としているのは、天理図書館蔵三浦若海旧蔵朱書校合本、贅川他石蔵(名著全集翻刻)本、安永板本、大磯義雄蔵本、等がそうである由、古典俳文学大系「蕉門俳論俳文集」の注に見えている。

三、漢語「本性」の語史

「去来抄」の大東急本系諸本が「本性」という字面を用いている事は、極めて重要な事実である。

「本性」という漢語は、平安朝以来用いられて来ており、語史的には「本情」より古く、「去来抄」の原初の形態がこれを用いたのは、この語の伝統的正用である。

ところで、これが蕉門の俳諧者流(去来をも含むかも知れない)の中で「本情」の方に移行したのはなぜか。「本性」という字面が示した本来の語感が、俳諧表現論が求める文学論的要請と必ずしも合わなくなったからであろうと私は思う。

近世語としての「本性」は清音で「ホンシャウ」と発音する傾向が強い。「日葡辞書」は「ホンシャウヲウシナウ」のように、明らかに清音を示している。そしてその意味は、本心、正気、平常心をさしている。これは現代も同じである。去来が俳諧表現論として「本性」を用いたのは、この現代語的「ホンショウ」とは合致しないのである。それは確かに、「宇津保」や「源氏」「枕」で読みなれた古典語としての「本性」であった。それは伝統に従つて「ホンジャウ」と濁つて発音していたに違いない。

ちなみに、いささか気になるので現代の辞書の「本性」の清濁の扱いを検してみると、案外に認識が徹底していない。

○大言海

本性(一)ウマレツキ。天然ノ性。(例略)(二)

「本心。正気。(狂気、酔気ナドニ対ス)(例略)

②角川古語辞典

ほんしやう〔本性〕①生れつき。天性。「わがもとの心の

——」〔枕〕②正気。本心「声の内より狂ひさめて、又——

にぞなりにける」〔語・巻網〕ほんじやう。

③岩波古語辞典

ほんしやう〔本性〕①本来の性質。生れながらそなわっている性質。「——はいと静かに心よく予めき給へる人」(源氏真

「木柱」②本心。また、正気。(例略)

濁音に読む中古語と、清音に読む近世語とは、別けて採録しないと、辞書としての役目が半分になるように思う。

「中古の仮名ぶみ系の古典語の一角を占めている「本性」は、明らかに連濁を生じて「ホンジャウ」と発音されていた。この事を断定する事の出来る資料は、その表記に求められる。周知のように普通の仮名表記には、清濁の指標がない。しかし、漢語系の外来語は、普通の仮名による表記の不可能または困難な場合がすくなくない。こうした場合漢字を使用した形跡がある。この場合はおのずから清濁が知られる。この種の漢字使用の中には、借音というものがある。この借音にも、通常の仮名による表記の不可能な場合に、その欠を補うという性格がはっきりしている。後世の「生」を「しよう」とし、「経」を「きよう」とする類の拗音・拗長音の仮名表記の発達する以前のものとするべきである。貫之自筆本のおもかげを留めているという青谿書屋本「土左日記」には借音表記の例はま

だ見られないが、漢字を表語的に正用した例は、概ね漢字としての表音機能を有している。だから「願」は「グラム」、「京」は必ず「キヤウ」と読むべきである。これは借音表記に延長して考えるべく、意味を捨てて音だけを借りる仮名としての機能を果たす。古い所では「倭名抄」の

内五(醍醐) 千開(線鞋) 善短(柄檀) 謝古(碑礫)

などがあり、滲透の古い事を知らせる。

さて「宇津保」「源氏」の類で、借音表記に宛てられた「行」「上」「生」「尺」などを観察すると、前二者は必ず濁音「ギヤウ」「ジャウ」に、後二者は必ず清音「シヤウ」「シヤク」に宛てられている。「宇津保」に、朱雀院に宛てて「寿尺院」とした例があるが、「尺」は「シヤク」という清音を表わしている。これだけは清濁通用かと疑ってみたが、字書を検すると「雀」は漢音「シヤク」呉音「サク」慣用音「ジャク」とある。「朱雀」は漢音で読んだものと思われるから、「宇津保」の「寿尺」はやはり「シユシヤク」と正しい読みを示したものである。ちなみに「寿」も漢音「シユウ」。皇城の門や殿舎の名は、原則として漢音で呼んだのである。但し、借音に用いた「尺」は、呉音「シヤク」を用いている。借音表記に漢音を用いた例はないようだから、その起源の古い事を思うべきであろう。

ともあれ、この借音表記は後世のものでなく、「宇津保」なり「源氏」なり「枕」なりの当初からのものである。これなしには、いろは四十七字では当時の国語を書き表わす事が出来なかつたので

ある。

ところで、漢語「本性」であるが、漢籍に見られるように、人間本然の性、天然本有の人情の意にまでひろげた用法は見られず、生まれつきの性格・性情、ないしは容貌・容姿など、専ら個人の上に用いられている。そして仮名ぶみになじむ古典語としては呉音で呼ばれていたが、〔音〕のような外来語音は、多少和音を帯びても仮名表記は困難であった。借音にたよる事になるが、その語の本来の文字をなぜ用いなかったのか、そこに借音の秘密があった。借音の漢字はすでに固定していて、「生」ならば清音「シャウ」、「上」ならば濁音「ジャウ」のように、既に表音記号としての体系に組み込まれていたのである。いうならばこれも既に仮名の一翼であったのである。借音文字を用いる事は、発音の指定であり、清濁まで指定していたのである。

『宇津保』の「俊蔭」の巻、「古典文庫」一一一頁、

「わがぬしを急はしたてまつるも心ありや。ゑひて、もはらし給はねば、本上あらはし給へとぞや」

左大将正頼が仲忠に言う詞である。「上」が借音で呉音「ジャウ」を表わす事、叙上の説明で明らかである。天成生得の才能を意味している。

同、「内侍のかみ」の巻、古典文庫七六六頁、

仁寿殿の女御、あしたの御まかないにいでたまふ。さらに本上の御かたち、この宮す所ににたるなし。

「本上」の借音、上に同じ。私はこの借音表記は「宇津保」創作

当初のものと思なす。つまり。「本」の韻尾〔ɲ〕のあとで連濁が生じて「性」の呉音「シャウ」が濁音化したのは、「宇津保」が書かれた当初からであったと見る。

『枕草子』、「四季の御障子の西面の立藪のもとにて」の段、三巻本では

「我もとの心の本上」とのみの給ひて、「あらたまらざる物は心なり」との給へば、

とある。能因本では「ほんしやう」と仮名で表記しているが、この表記は多分中世の転写の間に、借音の漢字から仮名に変えたものと、私は見なす。

『源氏』の「帚木」の巻、『湖月抄』によると、

さしもあだめきめなれたるうちつけのすきんしきなどは、このまじからぬ御本上にて、まれにはあながちにひきたがへ、こづくしなることを御心におぼしとむるくせなん、あやにくにて、

「真木柱」にも一例あるが、『湖月抄』では「本性」と正字を宛てている。借音から正字に反したものと思う。

前にも触れたが、中古の古典語としての「本性」は個々人の生まれつきの心情・気質・性格ないしは天成の容姿などをさすが、漢籍の用例が示すような、広く人間の本来自然の性情をさす哲学的表現にわたるものはない。そして連濁して「ホンジャウ」と発音していた事は、その借音表記の観察によって推定する事が出来る。近世佛論に見られる「本性」はやがて「本情」という字面を用いるように

なった点からが、「ホンジャウ」と濁って読んだと推定され、中古の古典語の流れを汲むものと見てよしかるう。ただし、人間の上のみでなく、草木鳥獸から無生物にまで広げられて、それらの諷詠の対象が自然に有する感じに及んでおり、小主観に左右されない本有の実感・実情をさしており、明らかに俳諧的写実主義の主張につながっている。その点で、これも近世語として現代に及ぶ「本心」「正気」を意味する「本性」とは別個の流れをなしている事も、前述した如くである。

四、蕉門俳論における本性―本情の理念の考察

まず、芭蕉が去来宛の書簡で越人の句を称揚したという、「かれが風流、ここに至りて本性を顕せり」の意味を考えてみたいのであるが、必ずしも解釈が容易でないような気がする。「羨まし思ひ切る時猫の恋」を芭蕉はどう解釈したのであろう。「猿蓑」所収のこの句、日本古典文学大系「俳論集」の頭注に、「思ひ切る」を諦める意に取って、「やかましく鳴きたる猫の恋も諦めるとなるとさっぱりしている。人間は煩惱を断ち切れない。羨ましいことだ」とあるが、いささか不審さを感じる。猫の恋には、人間の世智弁の及びもつかない一途さがある。何もかも思ひ切った恋にひたむきなその鳴き声、恋に身をやつし果てたその姿には、世間を思いかねたり、結果を打算したりする人間にない純粹さがある。それを羨ましいと言った句者は、なかなかいきなわかりの良さがある。越人の句

はそれだと思ふ。猫の恋に対して、それに成りきらねばこうは詠めない。

「思ひ切る」には、すべてを捨てて一事におのれを賭ける、決心する一義がある。「岩波古語辞典」には、木・其ひり、眞具。本許。「屍を一の谷でさらさんと思ひ切つたら直実ぞや」

という文例をあげている。(平家・九・一二の懸け)

猫の恋を詠ずるのに、恋がさめてしまったあとのけろりとした姿を見て羨ましいと言ったのでは、句の感もあるまい。芭蕉が称揚しそうもない。ここで思い出されるのは、『為兼卿和歌抄』の主張である。

何事にてもあれ、其の事にのぞまば、それに成りかへりて、さまたげまじはる事なくて、内外ととのほりて成ずる事、義にてなすと、その気味に成り入りて成ると、はるかに変はる事なり。

芭蕉も、越人の句が、猫の恋の気持に成り入って、よくその情を捉え得ている点を称揚したものであろう。多少無用の弁を弄したかと恐れるが、私には越人の句は、右のように理解される。

次の「鶯の身を逆さまに初音かな」等の句評は去来の見解を述べたものである。その核心をなすのは、（以下略）凡そ、句を作するに本性を知るべし。対象の眞実の真相を言うとして

い。句作の基礎を写実・写生に置こうとした意図を示している。これを知らない、徒らに表現の新奇を競うて、俳諧の詩として本意を失うであろうというのである。其角の華麗で新奇放胆な句風に対して、写生的手法を提唱しているのは、俳諧表現論史の上で、すこぶる注目すべきである。さきの先師評に見えた所は、句が対象の内的実相への観入を勧賞したのと、いささか方向を異にする。ともあれ、去來の本性論が、近代の写生説の先蹤をなしている事に注意して置きたい。

「修行」の部に見えるのも、去來の見解で、右の句評を通して主張している所を、改めて強調したものである。俳諧は新しい趣きを特に要とするが、それも写実・写生の基礎の上に立つべきで、その上に新意を工夫しなければならぬという。これも暗に其角一派の俳風にあきたりない事をほめかしている。つまり先師の言葉を受けてはいるが、一步新しい方向に動き出しているものと見るべきである。

右に述べた去來の論とも、芭蕉の論とも、やや異なった角度で「本情」（彼は「本性」とは書いていない）という語を用いて俳諧の表現を論じたのは、各務支考である。「統五論」の劈頭「滑稽論」に述べた所がそうである。いささか舞文の嫌いもあって、要旨の捉えがたがなきにしてもあらずだが、理論に長じた彼の長所を見せられている。「本情」

「滑稽論」の第一段に彼はこう書いている。俳諧といふに三あるべし。華月の風流は風雅の体也。おかしきは俳諧の名にして、淋しきは風雅の実なり。この三の物に及ばざれば世俗のたゞ言となりぬべし。

「俳諧」という名義は、もともと滑稽諧謔というに近く、「おかしみ」があるが故の名である。しかし、それだけでは、風雅としての俳諧とはなり得ない。花月諷詠の文芸である事を主体とし、「さび」をその「まこと」としていなければならぬ。花月を諷詠する日本の詩歌の伝統を守りながら、「をかしみ」と「わび」「さび」の美とを兼ねなければならぬ。「世俗のただごと」とは区別されなければならぬ。これが支考の理論の出発点である。詩といひ歌といふ、俳諧は高下の情をもち事なし。漢詩・和歌の美の世界をも包摂し、同時に平俗の「をかしみ」「わび」「さび」の世界を漏らさない。そこに俳諧の本領がある。俳諧がもともと滑稽の名であったからといって、平俗でさえあればよいと考えるのは、おろかなる俳諧師である、と彼は論ずる。そこで、俳諧の美をどこに見つけたらよいかという、俳諧美論が、「滑稽論」の第二段になっている。ここで彼は、文芸の対象の本情を見つけよと主張する。

有情のものはさらにいはず、無情の草木・瓦石より、道具・表色にいたるまで、おのれ／＼が本情をそなへて、尤人情にかはるべからず。其本情にいたらぬ人は、月華に対して月はなをけしらず。道具持てもたぬ人に似たるべし。

月や花の美が月や花の本情であり、その本情を知るとは、その美的実相を観入する事である。

金屏の松の古さよふゆごもり

炭俵の序に、この句の魂すはりてとかき侍りしが、そのたましゐるといふは何ぞや。金屏はあたゝかに、銀屏は涼し。是をのづから金屏銀屏の本情也。

しかるを、世の人、金屏の松の古びはよき冬籠なりと見てをかば、風雅のかたはしを心得たるといふべし。六月の炎天に金屏をたてんに、人の顔かゞやきてよからず。さる座敷は、道具しらぬ人に落べし。されば、金銀屏の涼暖を今の人の見つけたるにはあらず、そも天地よりなせる本情也。それをしらぬは誠にしらぬといふ人なるべし。

しかれども、金屏銀屏のうち出たる本情は、貴品高家の千畳敷とおもひよるべし。それを松の古さよといはれたれば、蝶つがひもはなれ、に元かゝりて、ばせを庵六畳敷のふゆごもりと見え侍るか。是風雅の淋しき実なるべし。金屏のあたゝかなるは物の本情にして、松の古さよといふ所は二十年骨折たる風雅のさびといふべし。

そも、本情あり、風雅あり、その本情たにしらぬ人の風雅に骨をらんとするは、とうふをあへものせむとおもへる、料理のたがひもあるべし。

さきの去来の写生主義的本性論に比べると、むしろ芭蕉の「本性を顕はせり」式の考え方に近いが、物にそれぞれの本情を知って、

その上に風雅のさびを発見するのだという主張が、本情をあくまで客観的に捉えようとしていて、その上に主体的な「わび」「さび」で色づけをしようとしているのは、芭蕉の句評から察せられる本性観とはいささか距離があるようである。

蚊屋しまふ夜や銀屏の花薄

この句もその秋、尾城のあたりより出たる銀屏也。かくいへば、奥八畳次十畳の座敷に、椽の月影もきらめき渡り、玉階夜色涼、如水といへるその夜のありさまならん。始の金屏は、松のふるびて取籠りたる座敷と見え、後の銀屏は、花薄のはなやかにして取ひろげたる座敷と見ゆ。是も銀屏は本情にして、花すゝきは風雅也。この本情と風雅のふたつをしりて、はじめて俳諧をしれる人といふべし。

ここまで来ると、さきの芭蕉の意見や去来の論とは大分変わって来る。特に本情と風雅と対立させ、素材の持つ美的本情を巧みに配置して、その上に句者の内蔵するさびの色を加える事で、俳諧が成就すると説くもの如くである。許六らが説いた「取り合わせ」説とも一脈相通する所がある。制作論としては、極めて知的な技巧主義である。

支考の考える「本情」は、右の句例が示すように、漢詩なり和歌なりから学び取る所の多いものであろう。「本情を知る」「知らず」としばしば言っているのも、それが教養として俳諧者流が学び取るべきものと考えている事を示す。俳諧者流は、一層の物それぞれの本情は、対象の世界に属するもの、「風雅のさび」

は、年を重ねて骨折って体得すべきものとしていられると思われ。支考らしいものと俳諧表現理論であったと評価してよからう。「続五論」の第二章をなす「華実論」の中で、次のようにも説いている。

このさかひは、二十年の腸をさくべき俳諧の工夫地也。をのれが心は女色美肴のたのしみをきて、口に風雅のさびをいはんとおもへる、心・口のふたつあらばいひもいはれぬべし。風雅は本さびしきもの也。女色美肴は最上のたのしみ也。たのしきに居ては淋しきをたのしみがたく、さびしきに居てはたのしきをたのしみやすしといふ所を、心におもひてついたらば、終りにそみ終りに喰らふとも、いかで風雅のさびなからん。年わかければさびなしなどいふ人は、俳諧のそも心より出るものといふをしらぬ人也。

彼が「さび」をこのように考えていた事は、さきの論を理解するたよりになる。

五、三冊子の象徴的表現論

一連の俳諧表現論として一括したのであるが、「三冊子」の著名な象徴的表現論には、異色もあるし、なかなか深い所も見られるので、独立の項として言及しておく。

代々の歌人の歌をみるに、代々其変化あり。また新古にもわたらず、今見る所むかしみに不替、哀成るうた多し。是まづ

不易と心得べし。又、千変万化する物は自然の理也。変化にうつらざれば風あらたまらず、是に押うつらずと云ふは、一端の流行に口質時を得たるばかりにて、その誠を責めざるゆへ也。

せめず、心をこらざる者、誠の変化をしる事なし。たゞ人にあやかりてゆくのみ也。せむるものはその地に足をすべがたく、一步自然に進む理也。行く未千変万化する共、誠の変化はみな師の俳諧也。かりにも古人の涎をなむる事なかれ。四時の押うつるごとく物あらたまる。皆かくのごとし共いへり。不易流行論の最も要を得たものであり、恐らくは師の芭蕉の遺教をよく伝え得たものであらうと思う。これについては、別に私の解釈を記してみた事もあるので、ここではくだけたと述べないが、これはまことの変化という事を言ったものである。不易を心に悟って、誠の変化を求めてゆくのが風雅の真の姿であると言った、芸術全般にわたる論であり、芸術の新し味に触れる極めてすぐれた論になっている。

高く心を悟りて、俗に帰るべし。松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へと、師の詞のありしも、私意をはなれよといふ事也。此習へといふ所を、己がまゝにとりて、終に習はざるなり。習へといふは、物に入つてその微の頭れて情感するや句と成る所也。たとへば、ものあらわにいひ出ても、そのものより自然に出る情にあらざれば、物我二つに

論である。

松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へと、師の詞のありしも、私意をはなれよといふ事也。此習へといふ所を、己がまゝにとりて、終に習はざるなり。習へといふは、物に入つてその微の頭れて情感するや句と成る所也。たとへば、ものあらわにいひ出ても、そのものより自然に出る情にあらざれば、物我二つに

成りて、その情誠に不_レ至。私意のなす作意也。

右の文中に、「その物より自然に出づる情」という観念は、前節に考えた「本性」本情」の観念に通ずる。「私意を離れよ」といひ、「私意のなす作意」を斥けている点は、去來の意見と方向を同じうしているが、去來の論は単に対象の实情に即して、その上に立つて新意を求めよという、写真・写生の主張となつてゐるが、『三冊子』の論は、物我一如・主客融合の境地を求めて、私意・作意の入る事を否定した象徴論となつてゐるとも見られるので、かなり本質的な差異がある。むしろの近代の歌論・俳論の写生理念の究極に一致してゐると見てよいのではなからうか。

六、結びに代えて旧稿一節引用

一般に俳句は客観的な文芸だといわれるが、これはある程度肯定されないこともない。しかし、いずれの文芸も主観と客観とのいずれを欠くことも出来ないことは、まず理解しておかねばならない。その中の、比較的客観的の勝つものを客観的といひ、比較的主観的の卓越するものを主観的と名づけることは、概念の整理の上から必要である。故に俳句が客観的だというのも、比較的問題であることは言うまでもあるまい。芭蕉の句などは、どちらかといえば主観の卓越を感じさせるもので、その点で、蕪村の客観主義・芸術主義の傾向とよい対照を示している。『奥の細道』の中の句でも、

行く春や鳥啼き魚の目は涙

などは、最も主観の卓越した句だと思ふ。別離の情と惜春の情とが溢れ出ている。「鳥啼き魚の目は涙」は、非合理の境に入った表現で、象徴的效果を持つが、写実味は棄て去つてゐる。同じ紀行の中の句でも、

しづかさや岩にしみ入る蟬の声

などは、対象の真にせまつてゐて、芸術的香気が高い。無限なる主観の迫力が対象の中に食い入り、対象の性命と合一してゐる。本情を顕すとは、かかる句であらねばならない。対象の真にせまるものは観照の力である。芭蕉の観照には非凡なる力と深さがある。

蕪門では凡兆の句などが、今日の俳壇から支持を受けてゐるが、凡兆の作風を観ると、観照の細緻精到な点ではむしろ師をしるぐものがあると思ふ。やはり芭蕉の一面を承けて完成せしめたと観るべきか。

芭蕉が「羨まし云云」の越人の句を評して、「彼の風流、ここに至りて本情を顕せり」と言つたのであるが、これは猫の恋の真を描破し得たとの評であると思われる。越人の句作が、此句に至つて初めて対象の真実に迫り得たと称揚したものであることは、疑いを容れない。

(本学教授・学長)